

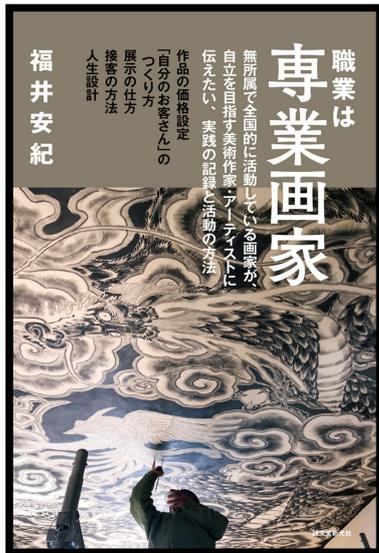
ソーシャル・プラクティスとアート研究会

○研究会について

本研究では、現代アート／社会学の文献を用いた講読会によって、21世紀以降の現代美術において注目されている「ソーシャル・プラクティス」としての現代アート作品とその理論についての議論を行っています。

○これまでの活動

本年度の6月より始動した本研究会では、これまでに二度の研究会を実施してきました。7月13日に開催した研究会では、ギャラリーに所属することなく専業画家として日本画を制作する福井安紀さんをお招きし、実践者としての立場から作品制作や経済活動に関するお話ししていただきました。そのなかでは、日本画の歴史的な変遷のなかで自身の作品がどのように制作されているのかといった方法論のほか、実際に作品を購入してもらうための戦略などをお聞きしました。



福井安紀さんの著作
『職業は専業画家』
(誠文堂新光社、2021年)

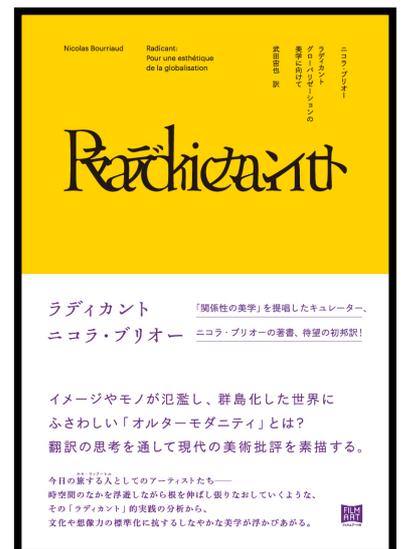
〈所属メンバー〉

- ・藤本流位（表象4回生）：
2000年代以降の現代アートを事例に、出来事や状況の運営者としてのアーティストがつくりだす暴力の表象を研究しています。
- ・柴田惇朗（公共4回生）：
芸術社会学。多様な社会的条件のもとで小劇場演劇人がどのように活動を維持しているかを研究しています。
- ・Kim Kyo（表象3回生）：
デジタル空間内での個人主権概念、デジタル法システムについて研究しています。また、フランスを拠点とするアート・コレクティブBlack(s) to the Futureのメンバー、デジタル/映像アーティストとしても活動しています。
- ・高畑和輝（表象1回生）：
戦後～1960年代までの現代音楽（前衛）、特に『武満トーン』と呼ばれるものを非楽音的側面から分析、検討をしています。音楽の、時間的・空間的表象に関心があります。
- ・中川陽平（表象1回生）：
ヴァイオリン製作の現場を事例に、現代における「伝統」と「科学技術」をどう捉えていくのかということについて研究をしています。
- ・西本春菜（公共1回生）：
ハンセン病療養所をフィールドに、体験を語る本人がいずれ不在となる地域の記憶がどのように継承されるかに関心を持っています。

○今後の活動について

春学期にはキュレーターのニコラ・ブリオーによる著作『ラディカント』の講読会のほか、ソーシャル・プラクティスとしてのアートに関する映像作品の鑑賞を予定しています。また、秋学期からの活動では、講読会のほかに関西圏の美術館・芸術祭へのフィールドワークを予定しております。

ニコラ・ブリオー
『ラディカント——グローバリゼーションの美学に向けて』
(フィルム・アート社、2022年)



以下は連絡先です
研究会代表：藤本流位
mail : gr0425fk@ed.ritsumei.ac.jp